

文語の苑

メールマガジン第二十八号（平成二十五年十月）

兄弟

西インドはプルシャプラにピリンチとして知らるる熱心なる仏法信者の女ありき。女の身なれば無力なれど男子を生みて仏道の興隆に役立てむと仏に祈りて、クシャトリア及びブラフミンの男によりて三人の男子を得。三人は長じて母の望みに従ひ仏道に入る。いづれも世親と呼ばれしが、後長男は大乗の道に入り、執着を離れむと欲して名を無著と改む。また世人三男を次男と区別しピリンチヴァサと呼べり。かくて世親と言はば次男のことなり。

無著は弥勒菩薩に会ひて教へを受けむとヒマラヤの山に分け入りて修行す。修行十年に及ぶも弥勒に会ふこと適はず。意気消沈して修行を諦め山を下る。道に一人の男あり。鑿を揮ひて山の一角の岩を削る。無著問ひて曰く何すれば岩を削ると。男答へて曰く、我家この山の麓にありてその陰になりて陽当らず、依つて我この山を削り去らむと欲すと。これを聞きて無著発奮し、再び山に戻りて修行に入る。更に十年菩薩の現前すること更になし。希望を打砕かれし無著荷物を負ひて山道を下る。途中一匹の犬に遇ふ。見れば下肢の一部を失ひたるが如く血を流しつつ足を引摺るのみなり。憐みを催し無著傍らに寄り、他に術もなければ傷口を舐めてこれを癒さむとす。俄に犬の姿消えそこに弥勒菩薩立ち給ふ。無著問ひて曰く多年我菩薩を見奉らむと苦行に励みしかくも長くそを許し給りざりしは何故ぞと。菩薩答へてのたまふやう、我は常に汝と共にあり、汝の得見ざりしのみと。無著の喜ぶこと当に天にも舞はむばかり。菩薩を肩に載せ奉りて行く。然るに道行く人、菩薩を見ること能はず市場を過ぎ行くに老婆あり。初めて無著を見咎めて曰く、汝何すればかく汚らはしき犬を負ふぞと。

無著その後、現観莊嚴論を著して密教修行の道を開く。密教においては文殊菩薩智慧を司り、弥勒菩薩方便を司るとせられ、弥勒の直弟子たる無著の存在の重きこと譬へやうもなし。

片や弟の世親小乗の道を歩みて説一切有部に入り研鑽を積む。その師のサーンキア派との論戦に敗るるや、世親一書を著して法敵を論破し、時の王の賞を受け弘くその名を知らるるに至る。その後仏教の存在論の集大成たる阿毘沙達磨俱舍論を著し小乗仏教の頂点に立つ。俱舍論は仏教の金字塔の一にして、中国を経て遠く日本にも伝わり、大乘の僧侶と言へども凡そ仏教学を志す者は学ぶべき必読の書とせらる。

世親、アヨーディアの地に拠つて説一切有部の教へを説きたるが、一日兄無著の訪問を受く。雁の便りに兄既に亡き者と聞及びし世親、怪しみつつ兄に会ひ臆て兄弟の間に論争起る。主知主義の小乗の立場に立つ世親、物質・思考を超えたる次元のあることを知らず。大学者として精緻なる論理を引揚げ無著に舌鋒鋭く迫るも、この世の者に非ざる兄に異次元の世界を疑ふべくもなく示さるるに及んで、之まで安住せし論理的日常次元の世界一挙に崩壊す。自らの非を悟りし世親、舌をきりて仏陀にその非を詫びむと悔ゆること甚し。兄それに及ばず爾後その舌を以て大乘を説くべしと慰めて靈界に去る。

大乘に転ぜし世親の活躍著しく、唯識論を確立し、更に浄土論の基礎を築く。正信偈に「天親菩薩造論説」、「天親菩薩論注解」とある天親菩薩は他ならぬ世親なり。親鸞聖人世親より一字を受けて親鸞と号せしことによつても明らかなるが如く、わが国においては世親は竜樹菩薩と並び仏祖に次ぐ地位を得たり。されどその兄なかりせば弟の仏道を究むるは能はざりしことなり。

文語の苑

メールマガジン第二十八号

小倉百人一首 二十七 高階貴子（＝儀同三司母）

わすれじの行末まではかたければ 今日をかぎりの命ともがな

歌の意味は、「男が、いつまでも忘れないと言ってくれ。しかしいつまでもと云ってもそれは難しい。それならばいっそ、男がそこまで言ってくれ今日かぎり死んでしまいたい」と云ったところでせ（しよ）うか。女の熱烈で激しい戀の氣持の昂揚がそのまに詠われて居ります。小倉百人一首の女性の歌の中でも出色の、感銘の深い歌です。この歌は、後代、後鳥羽上皇が特に愛唱なされたと言は（わ）れます。

作者は学者の家である高階家の出身、円融天皇の宮廷に仕へ（え）た女房で、高階家の「高」の字を取って高内侍と呼ばれました。高階家は、在原業平の伊勢の齋宮との密通から産まれた男子を、当時伊勢神宮に仕へ（え）てゐ（い）た先祖が引取って養育し、その高貴の子から代々續いてゐ（い）ることを、誇りとするとされる家です。貴子（きし）はその家の血を承け、美貌で、高い教養を身につけた才女として知られてゐ（い）たや（よ）うです。この人のところに通って来た相手の男は、「中關白」として知られる藤原道隆、つまり藤原道長の兄でした。

前回述べたや（よ）うに、藤原兼家兄弟の時代、藤原氏の力は、天皇家とそこから出た源氏の力を凌ぎました。その反面、藤原氏内の抗争は熾烈になります。兼家が兄弟抗争に勝って、藤原氏の氏の上となったため、兼家の長男道隆は、父の死後氏の上も關白職も繼いで、「中關白」と呼ばれました。高階貴子は家の身分としては、夫の道隆に遥かに及びませんが、道隆はそんなことは意に介せず、貴子の學識と才氣に敬意を抱き、正妻として遇します。世の人たちは、關白にまでなった人物の正妻が、かつて宮中に仕へ（え）た女官だったことを、恰好の當てこすりの種としました。しかし貴子は、道隆の長子の伊周（これちか）、一條天皇皇后の定子（ていし）等の子を産み、それぞれ立派に育て上げます。定子の優しく、思ひ（い）やり深い人柄と、女房たちが敬意を以て仕へ（え）た様子は、女房たちの一人、清少納言が、心を籠めて『枕草子』に記す通りです。

しかしこの藤原道隆と貴子、伊周、定子の「中關白」家の榮華は、束の間のことでした。大酒飲みだった道隆が四十代初めに世を去ると、弟の道長が動き出しました。伊周に謀を仕掛けて官位を剥奪、九州の太宰府へ追放します。一條天皇に皇后の定子が居られるのに、皇后の尊稱だった「中宮」を、皇后とは別の後の名とし、強引に、「皇后」のほかに「中宮」の名のもうお一人の后を設けます。つまり天皇に二人の皇后を配し、その「中宮」に自分の娘の彰子を押し込みます。彰子には、紫式部等の才女たちが仕へ（え）ました。

「中關白」家の没落はつるべ落しでした。夫の死後尼になってゐ（い）た貴子は、太宰府に追放される伊周にすがりついて、號泣したと傳へ（え）られます。定子皇后は落飾し、その後ほどなく世を去りました。貴子の後半生は不幸が續き、口さがなき人々は「才女の末路」とあざけります。道隆が貴子の外に、道長のや（よ）うに、貴子より身分の高い妻を娶って居たとすれば、道隆の死後も妻の一族の勢力によって、急速な没落は避けられたかも知れませんが、それだけに貴子には、自分が一族の不幸を招いたとの悔いがあったでせ（しよ）う。ただ慰めは、伊周が後年歸京して、地位はともかく儀禮上は、太政大臣、左右大臣並みの待遇を受け、「儀同三司」、つまり「儀は三司に同じ」とされたことです。

文語の苑

メールマガジン第二十八号

朝日ににほふ山ざくら花 愛國百人一首を讀む（二十三）

しきしまのやまと心を人問はば朝日ににほふ山ざくら花 本居宣長

「この日本の國の大和心とは何かと問はれたり、朝日を受けて匂ひ咲く、山櫻のやつなものだ」と答へたいものだ。

解り易い歌ですね。本居宣長は國學の四大人の内荷田春滿、賀茂眞淵に次いで三人目に擧げられる大學者で、三十五年の年月をかけた「古事記傳」は不朽の名著として知られてゐますし、この他にも「源氏物語玉の小櫛」を著して、かの紀貫之の「土佐日記」以來、受繼がれて來た美的感覺「ものはれ」、即ち遭遇する對象、「もの」に美學的な情趣を見出すのが文學の本質であるとし、源氏物語こそはその本質を表現した最も優れた作品であるとしました。また、「字音假字用格」を著して契沖の「和字正濫鈔」を讀へると共に、自らは字音假名遣に就いての基礎を打建て、歴史的假名遣の完成に力を盡しました。

宣長は歌も詠みましたが、理詰め之歌が多いと言はれます。掲出の歌も、櫻花を愛する日本人の心情がやまと心の基礎であると、なるほど理詰めで訓めさうです。でももう一度讀み返して見ますと、そこに宣長の感懷を垣間見ることができるとはでないでせうか。

先づこの歌は寛政二年（一七九〇）に詠んだものですが、上記「源氏物語玉の小櫛」の刊行が寛政八年、「古事記傳」の完成が寛政十年ですから、夫々最後の仕上に取掛つてゐた頃です。宣長はこれらの述作を通じて、謂はゆる「漢意」即ち漢學的思考から日本の文化を顯現する「やまと心」の獨立を唱へるに至ります。しかしこの歌の四年前、天明六年からは記・紀神代紀の記述年數の正確性や、日の神天照大御神の照徹六合の範圍を周り、同じ國學者の上田秋成と論争したりして、契沖から約百年漸く發展したとは言へ、漢學の巨大な蓄積に比して、國學の未成熟を嘆いてゐたこととせう。「人問はば」には「やまと心」がなかなか理解されない當時の状況の反映があります。いろいろ考へ抜いて、明け方山道を上つた時に目にした、朝日に輝く山ざくら花の風情、それは山の中で人知れず冬の自然の猛威に耐へて今咲き匂つてゐる、そのさくらへの感動は、我が國の古典を繙く度に、自然に湧いて來る日本文化發展の歴史への思ひに通ずる。さうだ、これこそがやまと心を正しく傳へるよすがであると、謂はゞ悟りの喜びをこの歌は詠つてゐると言へませう。

宣長の古學を慕つて多くの門人が松坂の「鈴の屋」を訪れました。國學四大人の四人目平田篤胤も「古事記傳」に觸發されて訪れましたが、既に宣長歿後のことでありました。宣長の研究を受繼いだのは石塚龍齋で、既に宣長存命中に「假字用格奥能山路」を完成、上代特殊假名遣の發見といふ偉業を達成したのですが、世に知られず、約百二十年の時を経て大正六年橋本進吉博士によつて初めて顯彰されました。

市川浩

文語の苑

メールマガジン第二十八号

文語唱歌「夏は来ぬ」(教育唱歌集)

一 卯の花の 匂ふ垣根に 時鳥 早も来鳴きて しのび音もらす 夏は来(き)ぬ

(山里は卯の花垣のひまをあらみしのび音洩らす時鳥かな 加納諸平)

*卯の花の匂ふ 五月雨の頃に咲く白い花が、美しく映えてゐる

*夏は来ぬ 「夏が来た」これを「こぬ」と読んで、否定だから意味がわからないと言ふが、「こ」は小倉百人一首にある「秋来ぬと」と「来た」といふ完了の意味。

「今来むと」の歌では「こむ」である。

「来・く」の活用は、「こ・き・く・くる・くれ・こ(よ)」だが、過去の助動詞

「き」の連體形「し」・已然形の「しか」のときは「こし」とも「きし」とも、

「こしか」「きしか」とも読んでよいので、ちとややこしい。

二 五月雨の そそく山田に 賤シノの女メが 裳裾シノぬらして 玉苗タマナ植つる 夏は来ぬ

(五月雨に裳裾濡らして植つる田を君が千歳のみまくさにせむ 榮華物語)

三 橘の かをる軒ケばの 窓マドちかく 螢ホタルとびかひ おこたり諫いさむる 夏は来ぬ

*おこたりいさむる 螢雪の功といふ故事から、「怠けるなと諭す」の意。

四 棟アサキ散る 川邊の宿の 門カド遠く 水鶏ウヰ聲して夕月涼しき 夏は来ぬ

*あふち 梅檀の古名、初夏に小花を咲かせる。平安鎌倉では獄に植ゑてゐた。

五 五月闇 螢ホタルとびかい水鶏ウヰ鳴き 卯の花さきて早苗ハヤナ植ゑわたす 夏は来ぬ

古歌をふんだんに織込んだ歌で、句末のリフレイン「夏は来ぬ」を除き、短歌と同じ五七五七七形式をとり、「よな抜き」八長調の曲といふ、歌詞作曲共、日本の傳統にのつとつた唱歌でありながら、複雑さをこめた上で格調の高さがあり、日本人の心に沁みる唱歌だ。

小山作之助といふ日本教育音楽の父と呼ばれた明治有数の作曲家が曲を先に作つて、後から佐佐木信綱に歌詞をつけるやう頼んだもので、信綱は大變苦勞をしたと傳へられてゐる。

東京大學を出た國文學者で、萬葉集の研究者として知られるが、歌人としても有名であると共に、短歌結社竹柏会を主宰して多くの歌人を育てた。

和歌以外にも、この「夏は来ぬ」のやうに歌詞も作つてゐる。多くの小中高學校の作詞をしてゐるが、さらには、軍歌の作詞も多い。日清戦争以前から大東亞戦争に至る長い期間にわたつてゐるのは長壽だつた故だらう。「勇敢なる水兵」は日清戦争のときの黄海海戦の逸話によるものであり、「水師營の會見」は、旅順開城のときの乃木將軍とステッセル將軍との會見の模様を詠んだ歌である。大東亞戦争では、「八ワイ海戦」の作詞をし、「再び仰ぐ乙旗を」と歌つてゐる。

谷田貝常夫

文語の苑

メールマガジン第二十八号

仲秋の名月

舊曆に據れば、満月を迎ふるは、通常毎月十五日の夜なり。而して、八月の満月を「仲秋（中秋）の名月」と讃ふるあり。

「仲秋」とは八月の謂ひにして、且つ、「中秋」は分きて八月十五日を指す。

舊曆の秋は七月より九月なれば、八月十五日は正しくその中日なり。

今年、舊曆八月十五日は新曆の九月十九日に該当れり。

翌日、某新聞紙に、名月を褒むるの記事ありて、曰く、「今年は幸ひにして、十五日の夜に仲秋の名月現はれたり。然れども、次に舊曆八月十五日の満月を見るは八年の後のことなるべし。寂しからずや」と。異なる事を。承る矣。こはいかに、何の謂ひぞや。

古来、日本人は満月を愛で来れり。就中、舊曆八月十五日は、炎暑果てて爽快の候となり、空澄み渡れるに仍りて、月麗しく、満月の中の華とも言ふべし。南蠻紅毛の人も同じき思ひありと見え、收穫の秋の満月とて、harvest moonの名あり。

満月の十四日もしくは十六日に移るふあれば、日本人すなはちこれを慮外の事と爲す。名月は十五日に訪るるなくんば、名月と仰ぐに足らずと思ひたるらん。

空の月は、曆の月の深まるにつれて齡を加ふ。太陽、月、地球の順に並びたるときには、月は日輪に照されたる面を地球に向けざるによりて、世の人、これを見ること能はず。このとき、月齡は0にして、「朔（さく・ついたち＝月立）」と言ふ。

太陽、地球、月の順に並びたるときには、月は満面を照し出ださるるによりて、缺くることなき麗容を示す。これ月齡十五日の月にて、「望（ぼう・もち）」と稱す。

月齡の整数に限らざること、言を俟たず。今、縁に座りて團子を啖ふ間にも月は齡を加へてあり。たまたま十五日の夜八時に全き満月を迎へたりと思ひ候へ。全き満月とは月齡15,000の月にして、一瞬にして生じ、一瞬にして消え行く泡の類なり。次の瞬間には、月齡15,0001となりて、もはや全き満月にはあらず。既に闕け始めたるなり。

而して、今を去ること二時間、午後六時に東に昇り来たりし月は、月齡ほぼ14.9の月にして、これまた全き満月にはあらずき。中空に昇るにつれて、齡を加へたるなり。

古典文學には、満月の十四日もしくは十六日に昇り来れるを記したるもの少なからず。

満月より満月までに要する時間はほぼ29.5日なり。これによりて、舊曆は一箇月を二十九日または三十日に定めてあり。然るに、この間に端數の付するありて、微妙なるタイムラグを生ず。しかるがゆゑに、舊曆と月齡の符合せざること、なきにしもあらず。十四日の満月、十六日の満月を見るに至れる所以なり。

さはさりながら、此の如き現象は稀にして、通常は、満月は十五日と定まりたり。

然而、右記の新聞記事に「八年を経ざれば十五日の満月を再び見ること能はず」とあるは、そもそも何の謂ひぞや。今より後、七年に亙りて、舊曆八月の満月は、十四日または十六日に現はるとの意ならんには、過てりと言はざるべからず。

苟くも新聞記事の、さほどの明確なる過誤を犯すあらんや。摩訶不思議のことなり。

あるいは余の誤解ならずやと思ひて、推理を重ねたる結果、左の如き結論に達したり。

月齡はその面を見れば明らかなり。馬の齡は齒に由りて分別せらる。月の齡一目瞭然たること、また此の如し。

文語の苑

メールマガジン第二十八号

月の面のうち何割何分の太陽に照されてありやを確認致せば、今日の月の齢を斷言するを得。但し、月の出現せざる時には、確認するに由なきは勿論なり。

春分秋分に近き満月は、ほぼ夕刻六時に昇りて、朝六時に没す。満月は、太陽より見て、正しく地球の裏側に存すればなり。

今、月齢とは、地球のいづこの地より見んとも同じきなるを忘るべからず。

昼の間は、月は地球の裏側に隠れてあり。その間に月齢イロに達したる場合には、日本にある人は、その瞬間を見ることを得ず。このとき、或いは人ありて言はん。「今月は全き満月を見る能はざりしなり」と。

此に因りて是を見れば、上記の新聞記事は、「舊曆八月十五日の夜に再び『全き満月』を見るは八年先のことなり」と言へるにあらずやとぞ思はるる。

さらに注意すべきことあり。

本朝震旦の舊曆に於ては、日付の變更の生ずるは深更にあらずして、天明なり。

假に、今日が舊曆二月十五日にして、新曆の三月二十日に該あたると思ひ做し給へ。新曆三月二十日は午後十二時に終り、その時より三月二十一日始まる。然れども、舊曆二月十五日は其の時點に終るには非ず。拂曉卯の刻に至り、やうやく日付變りて、十六日を迎ふ。

この新聞記事の筆者、若しくは其の参照したる天文學者は、この二つの曆のかかる齟齬を混同したるに非ずや。右の例によれば、舊曆二月十五日の午後十二時を過ぎてより後に月齢イロに達したる月を、十六日の満月と看做したるなるべし。舊曆に従へば、これは十五日の満月なるに、率爾そつじにして忘却したるに相違なからん。

あるいは、深夜の月は見る人なきによりて、除外したりとも察せらる。

我が推測に誤りなくんば、新聞記事の筆者は、「十五日の夜の仲秋の名月」を「十五日の午後六時より午後十二時の間に月齢イロに達したる月」と定義したるものと思はる。

これによりて、十五日の満月の現はれ得る時間帯は六時間となり、二十四時間より四分の一に減じたり。日本の傳統的なる「十五日の満月」と比較して、その出現する確率のかくも低下したるなり。今、漸ややくにして、彼の筆者の言はんとする所を理解するを得たり。出現の確率が四分の一となれば、七年に互りてその出現せざること、異とするに足らず。

新聞記事の筆者の過誤を犯したりや否やは一概に言ふを得ざらん。然りと雖も、讀者の理解に供すべき配慮の足らざりしを難ずることを得べし。

文語の苑

メーラムガジン第二十八号

し残せること

人生半ばを遙か昔に過ぎ、時に己が来し方を振り返れば、この日頃気にかかる思ひ出あり。我、幼き頃、恩を受けし人に対し、感謝の念を示さざるまま放置したることぞある。

小学一年になりて日浅き頃と覚ゆ。かねてより親にねだりをりたる上履きと上履袋やうやく手にして喜び、それを振り振り学校に向ふ時、嬉しさあまりて大いに振りたるその刹那、何の加減たるや手を放せり。これ折悪く橋の上。上履、欄干を超えて飛ぶ。下のその川、大河にはあらねど川幅五十メートル余。この時、水深四、五メートルに及ぶべし。

うろたへて橋を引返し、堤防を駆下りて見れば我が上履、橋脚に纏付きたる水草塵芥の間に袋ごと留まるが見ゆ。我、錯乱し、いかでか回収はからむと靴脱ぎ水に向かふ。このとき、異常察知したる見物人既に多く、橋の上より我を見下ろして「あぶなし」「行くな。溺るぞ」「あきらめろ」と叫びぬ。中に「上履はまた買ってもらへ」の声あり。さ言ふは、我が親を知らざる者。不注意にて失せたるものを買ひ直すほど甘き親にあらねば「さに行かず」と大声返すを記憶す。

この堤防、水面近くは角度急なるコンクリート。我その途中まで下りし時、初めて恐怖に取憑れ先に進むことならず。さりとて急なる斜面、這上り引返すも能はず。進退極まり、ずり落つること避けむと四肢踏張りつつ泣き始む。

そのとき、救世主現る。対岸の菓子屋が主人、手漕舟を有しをれば、騒ぎを聞きて我がために舟を出す。器用に漕ぎて橋脚に近づき、浮きつ沈みつする上履袋拾ひ上げ、舟をこちらに寄せ、我が這ひ蹲るところ近く、平らなる箇所に放り上げ給ふ。

勝手なるかな。舟来るを見、上履、我に戻るを確信せるそのときより、我が心配は学校の始業時間に遅るるに移れり。大人の手を借り斜面上がるや否や、見物人が手にある濡れそばちし上履ひったくり、学校に向け一目散に駆出しぬ。舟、対岸に戻り給ふ。

始業の時間に間に合ひたるか、濡れたる上履をそのまま履きたるか、その後の顛末、記憶更に無し。いかなる騒動あれども上履戻れば一件落着。家に報告すべき大事とも思はざりき。明る春の終業式にて一年の皆勤無遅刻賞に与れる事実よりすれば、事件に拘らずこの日も遅刻せざりきと想像す。

仮に、かの菓子屋が主人、舟を出し給はざらば如何か。我、或は制止を振切りて川に入り、大人の見物人数多ありと言へども、罷り間違はば重大なる結末に至れるやも知れず。然るに、我は彼の主人に礼の一つも言はざりき。親切に対する感謝の念を示す事を知らず。あらためて出向きて謝意を表する作法にも思ひ当らざりき。

ある日、母、然然のことを聞きたるが事実なりやと問ふことありて、初めて数日前の事件を思出し、この母の耳に届きたるを知る。或は母、菓子折りなどと持ちて礼に出向きたるやも知れず。然らば、当事者たる我を伴はざるは、母に何事か思ふところありぬべし。我、その何たるやを知らず。とまれ、我には彼の主人の親切を受け、自ら一言の礼だに言はざりし事に、今、悔残れり。その年齢を思へば最早この世にあり給ふことなかるべし。これこそ我がし残せることのひとつとなれ。

兒玉稔

文語の苑

メールマガジン第二十八号

「人種差別」

半世紀も前のこと、父の赴任地、米国の首都ワシントンにおいて初めて人種差別に遭遇せり。それ以前パリにて初めて黒人に接触せし時は、幼きながら黒き人間が存在するを認識せり。されど、一九六十年代前半米国においては公民権運動真つ盛りにて未だ差別横行し、トイレに行くに難儀したり。Colored色つきもしくはwhiteと明示してあり、中学生なりし吾はアジア人にて白人にはあらずと思ひて、色つきトイレに行く。黒人にお前は白ければ白人のトイレに行けと言はれ、入ると白くなければあちらなりと言はれ、トイレに行かれず右往左往せし記憶あり。学校もまた、白人の学校に通ひたれど、公民権法制定せられ黒人の子供たちも入学してきたり。ただ、住居によりて白人の多き居住区域なればなほ、白人の学生大多数なり。ワシントン市内には白人、黒人と明らかに異なる居住場所あり。私立の学校に転校せし時は、富裕層の子女のみにて、目指す大学はアイビーリーグ、送り迎へは高級車なり。黄色人種といへば日本人は吾一人なれども、イランやインドネシアの石油王の娘たちも在籍せり。よりて黒人は一人たりともあざざりき。私立の学校においてはさほど差別は感じざれども、公立の学校では顕著なりけり。白人至上主義のごときものは嫌と言ふほど味ふ。これは一個人のことなるが、その国のレベルに響かずんばあらずと言ふを得るにあらずや。日米同盟などと政治家たちほざきたれども、いつこまで真のパートナーと覺えたるか疑問なり。

赤谷慶子

文語の苑

メールマガジン第二十八号

ラダック紀行（其之三）

今回の印度ラダック旅行は西日本のヨーガグループの企画せしものにて集合場所は關西空港なり。京大阪に前泊なすも又一興とて覚悟し居る処、關東の参加者半数を超えたれば、成田空港出發便も追加と相為りぬ。大阪及び廣島在住ヨーガ指導者音頭取りを務むるものにて、大阪のKさんは關西空港より出發、廣島のMさんは態々東京に來たりて成田發組に同行す。兩人とも女性なれば参加者中三分の二は女性なり。倍音聲明は皆で發聲する瞑想故、女性の聲多きこと如何なるや、倍音發生良好なるやと案ずるも、其の実特に問題とはならず。男性の聲の女性より強き故か。

廣島のMさん、成田にて足挫きけり。デリー空港到着時には緩慢なれども独力にて歩行可能なり。されどラダックにてはホテルのボーイの肩をば借りての歩行と相成れり。翌朝早く我自室窓より中庭をば眺むるに、N師何やら作業中なり。何処にてかY字型の頑丈なる枝を入手、木の叉にはタオルを巻付け固定、脇の当る部分の緩衝材とす。下部は金屬にて別の木を繋ぎ、調節により長さの変更可能なり。旅先にての即席作品なれど見事なる松葉杖出来上がりたり。論語の一節を連想す。

「吾少^わかり也^{せん}賤。故に鄙事に多能なり。」

賤や否やは知らず、N師の多能多才勤勉なるに改めて驚愕敬服す。

朝食時、Mさん自力歩行にて現る。

「松葉杖不要なりや」

と尋ぬるに、

「然り、N先生の工作知りて、忽ち痛み収まれり」

と。所謂シヨック療法なりや。

余、嘗て或る病の為通院、手術の日取決定するや、何故か症状消失せる経験あり。シヨック療法なり。

Mさん松葉杖をば持ち帰り旅行の記念品と為せりとぞなむ。